

## 卓 話

## 『岐阜北ロータリークラブとの出会いがあってこそ、今の私がある』

1993年度ロータリー財団奨学生  
現 岡山大学大学院教育学研究科教授  
大竹 喜久

## 1. はじめに

今回、私が卓話の場に立たせていただいたのは、私の息子のロータリー財団奨学金の申請資格の確認に際し、岐阜北ロータリークラブの方々にお骨折りいただいたことがきっかけでした。結果は、すでに留学中の身分であったため、息子には奨学金制度への申請資格がないことが判明したのですが、父親である私自身が20年前に岐阜北ロータリークラブの推薦を得て財団奨学生として留学させていただいたにもかかわらず、一時帰国の折に一度留学の報告をしたのみで、その後は何もせずに過ごしてきたことに「はっと」させられました。今回、すでに別の方が卓話されるはずであったにもかかわらず、それとは知らずに報告の機会を与えてくださるようお願いをしてしまった私のわがままをお許しくださったことに感謝いたします。

## 2. 奨学金申請のきっかけ

申請を思い立った1991年、私は特別支援学校（当時の養護学校）の教員でした。知的障害があり、かつ運動機能障害もある子どもたちに対して、「大竹先生とこの遊びがしたい」と思えるような遊びを体験させ、「大竹先生のところまで行きたいから歩く」、「もっとやってほしいという気持ちを大竹先生に伝えるために言葉を使う」という中で子どもを育てようと日々格闘していました。教師が必死になれば、確かに子どもはそれなりに育っていきまし、学校という限られた空間の中では、子どもはそれなりに幸せな生活を送っていたと思います。ただ、「本当にそれだけでよいのだろうか」という噛みきれない思いがずっとありました。

そんな折、岐阜大学の図書館でアメリカの教育雑誌を読んでいた時に衝撃的な論文を見つけました。その中には、重度の知的障害者がジョブコーチと呼ばれる支援者の助けを得ながら一般就労を果たしているということや、重度の知的障害児が通常の学級に在籍し、教育補助員の助けを得ながら学習に取り組んでいるということでした。そうした実践を支える理念を「インクルージョン」と呼ぶことも知りました。その時、「アメリカの学校現場をぜひ見てみたい。また、そういう実践の担い手である教員やジョブコーチを育成するようなプログラムで学んでみたい。」という思いを強くしました。

当時、学校教員が海外で学ぶ機会をバックアップしてくれるような制度はありませんでした。「もしそれをしたければ、退職しなさい」という時代でした。急に思い立ったことだったので、1年間の留学を実現させるだけの貯金もありませんでした。すでに妻子がいましたので（息子は当時2歳）、普通の人であれば仕事をやめて留学というギャンブルには突っ走らないでしょうが、留学関係の雑誌を見ていた時にたまたまロータリークラブの門をたたきました。幸運にも、岐阜北ロータリークラブ奨学金委員会の皆さんが私の話に耳を傾けてくださり、同クラブのバックアップを受けることになりました。その後はTOEFL（Test of English as a Foreign Language：英語能力試験）の勉強を必死にやり、幸運にも国際ロータリー第2630地区（岐阜・三重）の奨学生として1993年8月から1994年5月の10か月間、障害児教育プ

プログラムでは全米5位にランクされていたイリノイ大学アーバナー・シャンペーン校修士課程で学ぶ機会を得ることができました。

### 3. 奨学金制度により歩んだ経路

奨学金を得て1年間イリノイ大学で学んだ後、教育・研究助手として大学からの奨学金を得ながら、また、日本語学校補習校で教員として働きながら、引き続き同大学の修士課程（1994年～1995年）と博士課程（1995年～1998年）で勉学を続けました。研究テーマは「留学のきっかけ」で述べた「重度知的障害者が障害のない人たちと学んだり仕事をしたりすることを可能にする具体的な手立ては何か」でした。敢えて徹底的に還元したときに、その問いの答えは、障害者の「強みを生かすこと」と「強みを生かす機会を創り出すこと」の2つに整理できました。

例えば、床を隙間なく掃くという課題を取り上げてみます。きれいに掃くためには、少なくとも掃いている間は自分がどこを掃いたかを覚えていなければならないわけですが、重度知的障害者にとってそれはとても難しいことです。通常は、誰かがずっと付きっ切りで言葉をかけたり、身振りで掃く場所を伝えたり、手をとって掃く場所を教えなければなりません。ところが、アメリカの障害児教育の発想はまったく異なっていました。「重度知的障害者は、どこを掃いたかが見えないからできないのだ。だとしたら、掃いたところを見えるようにすればよい。具体的には、あらかじめ、細かな紙くずをまいて床を『わざと汚す』。そうすれば、彼らは人の助けを得ることなく、自分で床のすべてを隙間なく掃くことができる。」現在ではよく知られる手立てとなりましたが、当時の私にとっては度肝を抜かれる発想でした。

重度知的障害があっても掃き掃除ができる、ということになれば、それを生かすことができる就労場所を見つけ出しさえすれば、一般就労への道も開かれます。アメリカのインクルージョンを推進する専門家は、「わざと汚す」ことが可能な清掃職務を伴う職場として、例えば、重曹のような色のある洗浄剤を撒いて清掃するカーペット洗浄事業所を候補として挙げ、就労実現に向けてそれら事業所との交渉を行うことを推奨します。重度知的障害者の強みを生かす機会を創造する際に見られる専門家らの柔軟かつ大胆な発想は、その後の私に多大な影響を与えました。

博士論文が半分ほど書きあがった1998年2月、岡山大学教育学部特別支援教育講座の職員公募に応募したところ、運よく採用され、同年4月より岡山大学教育学部の専任講師として研究・教育活動に携わることになりました。それ以降、16年間、岡山大学で研究、講義、社会貢献に勤めてきました。

現在は、岡山大学大学院教育学研究科教授として、主に3つのことに力を入れて取り組んでいます。

（1）障害のある人たちの強みを生かす指導法の開発： 私の研究における参加者は、自閉症スペクトラム障害児です。自閉症スペクトラム障害という用語は最近、テレビ番組や本でよく目にする言葉になってきています。学校や職場において、知的障害はないけれども他者の気持ちが読み取れず、自分流のやり方に固執するがために周囲の人との間でトラブルが絶えない、といった人の中に、自閉症スペクトラム障害の診断基準に当てはまる人が少なからず存在することがわかってきたこと、また、世界の様々な国で行われている大規模調査において、この障害に該当する人の割合が80～100人に1人であることが示されたことが背景にあります。ただ、私の研究協力者は、最近になってその存在が明らかにされてきた人たちではなく、

ずっと以前より、かかわりが難しい障害として専門家の間では注目されてきた「古典的」自閉症スペクトラム障害、すなわち、知的障害があり、他者との感情的な交流に困難を示し、特異的な対象物に異常なこだわりを示すような子どもたちです。

こうした子どもたちが特別支援学校小学部に入学してくると、まず行わなければならないことは、片づけや着替え、手洗い、トイレでの排泄、食事など、基本的な生活習慣に関する指導です。彼らの中には、なかなか活動に取り掛からなかったり、取り掛かっても途中で何度も関係のない刺激に気を取られて遂行が滞ったり、あるいは活動それ自体に嫌悪性を覚えてまったく取り組もうとしなかったりする者も少なからずおり、教師や保護者はそうした子どもたちと日々格闘しています。でも、もっとも格闘しているのは、わけのわからないことを「させられている」子どもたちでしょう。子どもたちが「したい」と思って活動に取り組めるようにするための手立て、そして、教師や保護者が「それだったら使ってみたい」と思えるような教材の開発にこれまで取り組んできました。ここで、私が開発した教材の例を一つご紹介します。自閉症スペクトラム障害の特性の一つに「限定的な対象物に特異的なこだわりを示す」があるのですが、その対象物の中には機関車トーマスやアンパンマン、トランスフォーマーといったテレビや映画のキャラクター、タランチュラーやティラノサウルスといった動物のようなものが含まれます。彼らの中には、こうしたものが出てくる番組を食い入るように見つめたり、それらのグッズを集めたり、それらの人形で遊んだり、自分がそのキャラクターになりきったり、多くの時間をこうしたキャラクターとともに過ごす者が結構いるのです。子どもにとってそれほど価値のあるものであるならば、もし、そのキャラクターが楽しそうに着替えや歯磨きなどを行っている様子を見せてあげることができれば、子どもたちの中に「キャラクターと同じようになりたい」という思いを呼び起こし、キャラクターのやり方を模倣しようとするのではないか。そのような仮説を立て、天気予報の映像で用いられる合成手法を駆使して、当該児童のこだわりキャラクターが彼（女）の教室に現れ、子どもに教えたい活動にそのキャラクターが取り組むビデオクリップを作成してそれを視聴させる取り組みを行いました。

結果は期待通りでした。子どもたちは、ビデオを見ながら（あるいはビデオ視聴後に）活動に集中して取り組むようになりました。しばらくすると、ビデオを見なくてもそれができるようになってくることもわかりました。もちろん、すべての自閉症スペクトラム障害の子どもに使えるわけではなく、ある条件を満たさなければ効果が出ない手法ではあるのですが、やり方さえ覚えれば、どの教師であっても保護者であっても作成が可能ですし、何よりも、子どもが楽しみながら日常生活で求められる活動に取り組むことを可能にする魅力的な手法です。

（２）世界の人たちに向けての研究成果の発信： 今、国立大学法人は国際的な競争にさらされようとしています。各大学がどの程度国際的に開かれているかによって、予算配分も左右されます。理系の教員は英語で論文を書いて国際的な学会誌に発表することが当たり前になっていますが、文系の教員、とりわけ教育学系の教員が英語で論文を書き、世界に向けて発信することはほとんどありません。確かに、効果的な教育実践については、日本の研究者や教育者、保護者に分かり易く伝えることは大切ですが、同じような問題に頭を悩ませている人たちは世界に多くいるわけで、そうした人たちに、少しでも可能性のある指導の手立てを理論（なぜ効果があるか）とデータ（本当に効果があるか）を添えて英語で世界に発信することも大切です。その推進役になろうと、自閉症スペクトラム障害児の参加協力によって生み出された研究成果については、世界から注目されやすいアメリカ合衆国の学術誌

に発表するようにしています。

(3) 国際感覚を持つ教師の養成： 私は学生たちに、「岡山大学教育学部特別支援教育コースで学んでよかった」と思って卒業してもらいたいと思っています。そのために私に何ができるのかを考えたときに、私自身が最もわくわくしながら障害児教育の魅力や本質を語ることができ、かつ、日本の障害児教育がこの先めざすべきことをすでに行っているフィールドへ、まさに時空を超えて学生たちを連れていくことだと直感しました。私にとって、アメリカ合衆国カンザス州オーバーランドパーク市のブルーバレー学区、ミズーリー州カンザスシティセンター学区がそうしたフィールドであり、2005年より毎年（2012年は私の都合がつかず中止となりました）有志の学生とともに、それらの学区の小中学校、高等学校、コミュニティーカレッジを訪問し、そこで展開されている障害児教育プログラムを参観したり、子どもとかかわりを持ったりする機会を与えています。私はこの研修を「カンザス研修」と呼んでいます。この研修で、学生たちは日本では考えられない実践に接し、「既存の思考の枠組みの崩壊」を体験します。例えば、普通の高校で、中・重度の知的障害生徒と障害のない生徒が毎週2回のソーシャルスキルの授業を一緒に受講している姿、さらに、知的障害生徒が障害のない生徒と一緒に週末プロジェクト（週末、好きな余暇活動に参加し、互いのよさを発見する）のプレゼンテーションを一緒に参観するわけです。こうした常識を覆す実践は、学生たちのものの見方へ考え方を大きく変えることとなり、その後の大学生活や教員生活において、人には見えない世界が見える、あるいは、本当に大切なこととは何かについて考えることができる学生の育成に貢献しています。

今、ここで挙げた3つのことは、20年前、岐阜北ロータリークラブの推薦を得て、ロータリー財団奨学金制度の下、1年間イリノイ大学で勉学に励む機会を与えていただいたからこそ可能となったことです。私の3つの活動を通して、数多くの障害児、研究者、教育者、保護者、そして学生たちが育てられてきたかを考えた時、岐阜北ロータリークラブという一つの歯車の回転が生み出した力の大きさに対して畏敬の念を抱かずにはいられません。帰国後のご報告をてから20年の時が過ぎてしまいましたが、その20年間は決して「失われた20年」ではなく、岐阜北ロータリークラブから受けとった力を元手に「新たな歯車をつぎつぎと回し続けた20年」であったことをお伝えして、私のつたない話を閉じさせていただきます。ありがとうございました。